
ユウラス大陸記

葵かずさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユウラス大陸記

【Nコード】

N1136S

【作者名】

葵かずさ

【あらすじ】

主人公、エンリは、父が好きだった。

父が向けてくれる、優しい微笑みが。

父は自分を家から出さないようにしていたけれど、それでも構わなかった。

父に、愛されてるならと。

彼女は、父がすべてだったから。

でも実は、エンリは大好きな父と血が繋がっていなかった。

？
(前書き)

第一話です。

最初は暗いです。

？

エンリは、父がとても好きだった。

自分に向けてくれる、あの優しい微笑みが。

父は結構高位の爵位についているようで、いつも忙しそうだが、そうだったことはエンリは知らない。

父は何一つ、外のことを話そうとしなかった。

家の敷地から出るなど言われ、敷地を囲むように高い高い壁が囲つてある。出るためには、門から出るしかない。

つまり、壁はエンリを外に出さないために作られたものなのだ。

エンリは父と使用人以外の人にあつたことなかった。

屋敷に訪れてくる人は度々いたが、皆、エンリに会わせてはくれなかった。

エンリは、籠の鳥のようなものだったのだ。

でもエンリは、それでも良かった。

父が、あの優しい微笑みを見せてくれるなら。

父が嬉しいのなら。

自分はなにも知らず、誰にも会わず、閉ざされた世界で、ずっと、暮らそうと。

エンリはそう、思い続けていた。

そう、ずっと。

？（前書き）

第二話です。

？

「お父様っ！これ、見てくださいっ」

その日エンリは朝からずっと庭の探検をしていた。

昼過ぎになったごろ、父が戻ってきたと聞いて、急いで父の書斎へと向かった。

父は部屋の壁を埋め尽くすように本棚が置かれ、どの棚にもぎっしりと本が埋め尽くされている。

嬉しそうに入ってきた娘を見るなり、父は期待したような声で聞いてきた。

書斎に座る父はかつこよかった。出来るだけ父に近づく。

「なんだ、エンリ。何か見つけたのか？」

父の言葉に嬉しそうに返事をしながら、エンリは手に持っていた果実を父に差し出した。

「はい、お父様。庭で見つけたんですっ」

「おお、フールの実か。良く見つけたな」

フールの実は、年に一度、一週間だけ咲く花から、受粉できた花からしか実のらない、きわめて貴重な果実なのだ。

花は受粉する確率も、一つの木に咲く花の量も少なく、実ができる確率は低いのだ。

「でしょう？カリサと一緒に奥の方まで行ったら、ポツンって何にもないところに出て、そこにフールの木だけ生えてたの！」

カリサとはエンリ付きの侍女だ。

エンリは嬉しそうに言う。綺麗な金の髪がふさりと揺れる。それに對し、父は少し眉がよった。

黒髪黒眼の父に對し、エンリが金髪碧眼なのは、亡くなった母がそうだったからだと聞いている。

「まさか庭にフールが生えてるなんてな…もしかしたら他にも生えてるかもな。」

父は少し興味がわいたようだった。

「そうなのですか？今度探してみます。お父様——」

言いかけのエンリの言葉を遮るように父の言葉が部屋全体に響く。

「エンリ。私は忙しいんだ。また今度にしてくれるか？」

微笑んでるのに、突き放すような口調の父に、エンリは口答えできない。

「——は、い。わかりました。お忙しい中、失礼致しました。」

そう言うのが精いっぱいだった。

お辞儀をし、くるりと父に背を向け歩き始める。

扉までたどり着くともう一度父にぺこりとお辞儀をし、退室した。

その間、父は一言も言わなかった。

「エンリ様、どうでしたか？旦那様はお喜びになられたましたか？」
部屋に戻ると、カリサが椅子に座るように促しながら早速聞いてきた。

椅子に座りながら、エンリは答える。

「そうね……。とても、よろこんでおられたわ」

その声には、張りがなく、どこか悲しげだったが、カリサは気にしていないようだった。

「そうですか！それはようございましたね」

嬉しそうなカリサに対し、エンリは悲しかった。

「……」

カリサが顔を窺うようにこちらを見ている。

「エンリ様？」

「―何でもないわ。ね、今から何する？勉強以外で」

エンリは勉強が苦手である。正確に言うと、めんどくさいに近いのだが。

だから毎日庭で遊んだりして勉強しないようにしているのだが。

カリサはその言葉にええ！と声を上げる。なにかひらめいたようだ。

「そうですよ。お勉強しましょう！」

「勉強以外って言ったわよね…？」

「だって最近、エンリ様ちつともお勉強なさってませんじゃないですか。旦那さまが困っておられましたよ」

「お父様が？」

「はい。いつになったらエンリは勉強するんだって。たまにはなさった方が…」

「でも私、なにか勉強しようか悩むのよね。歴史？それとも外国語？物理学？」

「まあ、お悩みになって当然だと思います。―では一つ、あるお話をさせてもらってもよろしいですか？」

「カリサが？」

「はい。それは、むかしむかしのある王国のお話です―」

首を傾げたエンリに、カリサは優しい声で語り始めた。

？（前書き）

昔話です。

？

むかしむかし、大陸全てを、ある一つの王国がまとめておりまして。

最初から一つの国が纏めていたものではありません。
初めはいくつもの国があったのです。

そして、国々は毎日戦火が絶えませんでした。

その中でも、一番小さな国は大陸の中央に位置し、よくほかの国の戦争に巻き込まれておりました。

小さな国の王は、他国の戦争に巻き込まれ、傷つく自国の民を思い、賢妃とともに幾日も考え続けました。

そして、思いついたのです。国といういくつもの境を無くして、一つにしてしまえばいいんだと。

そうして王は、他国の王を全員集め、会議を開きました。

王はそこで、自分の意を全て述べ、異見を聞きます。

―戦争を終わらせようと。

―終わらせるためには、国々が一つになる必要があると。

―一つになった国の王は、私がやると。

全て、述べたのです。

もちろん、どの王たちも反対します。

なぜ、お前のような小さな国の王が、王になるのだと。

私になるならいいと。

それに王も負けずに唱えられた異見のすべてに答えました。

―争いばっか起こし、ろくに民を幸せにできないあなたたちが王になるのはおかしい。

―だから、私がやるしかないのだと。

それに、ほかの王たちは何も言えなくなっていました。

思えば、この若き小さな国の国王は一度も戦争を仕掛けてくることをいしなかったのです。

王たちは深く考えた後、この若き王に国のすべてを託すことを決めました。

若き王は、国を自分に託すといった王たちに約束します。

貴族の地位を渡そうと。

そして、大臣になり、私のもとにいて、国が傾くような危機になれば、助言してほしいと。

そうして、大陸の中心に位置した小さな王国の王は大陸の王となり、周りの国々の王たちは貴族となりました。

大陸全てをまとめ上げた国の王はセブラという名の、まだ青年というには若い王様でありました。

ゼブラ王は妃とともに願いました。

もう二度と、争いの起きないような世界であってほしいと。

世界が一つになってから、数年。

ゼブラ王と妃の間に、一人の可愛らしい女の子が生まれます。

ゼブラ王は娘にサジュと名づけました。妃似の金髪碧眼の、可愛らしい娘でした。

古代語で、希望、という意味をもつ、サジェは美しく、妃のように賢い女性に育ちます。

ゼブラ王はサジェが成人すると、ゼブラ王は安心したように、娘に国を預けてこの世を去ります。

サジェは父の死に悲しみながらも、母とともに国を導いていくことの決めました。

ゼブラやサジェがこの世を去ってから何千もの時が過ぎました。

世界は、かつてゼブラや妃が願ったように、一度も争いが起きない、それは平和な世界へとなっていました。

しかし、それは一瞬にして消えてしまいます。

かつてゼブラ王の国の隣国に位置し、一番軍事力が強かったソーリヤという王の子孫であり、貴族で あるユオという青年がある日突然、王宮を私兵とともに襲ったのです。

彼は国が軍を持たず、平和主義者な王に不満を持っていた。

彼は見事、王宮を火で燃やすことに成功し、王も殺すことができました。

王族は皆、彼が殺したはずでした。

しかし、何か足りません。

燃えた王宮を歩いてその『何か』を探すユオに、彼女は会いに行きます。

その日も、『何か』を探しまわるユオに、彼女は背後から近づいた。

そして、彼のすぐ後ろに立ち、言い放ちます。

―あなたが探してるのは、私でしょう？

彼は、後ろを振り返ると優雅にそこに座っている少女に驚いた。

金髪碧眼の、王家の、王の、娘。

王の三人いた子供たちの、末っ子。

いつも表に出ず、目だたなかった、おとなしい王女様。

―あなたが、お父様を、お母様を、お兄様を、お姉さまを、叔父様を、叔母様を、殺したんでしょう？

怒った様子もなく聞いてくる娘に、青年はどうこたえていいのか分からなくなった。

正直に言うべきか、うそをつくべきか。

―わたくしの質問に、答えられないの？

静かにといたたす、明らかに自分より年下の少女に、青年は冷や汗がたらたらと流れ出てくる。

そのとおりでございます―そう答えた青年は、気がつけば少女に

膝をついていた。

青年の言葉に、あっさりとした口調で、少女は続ける。

―そう。じゃあ、これからあなたは私に一生仕えなさい。

ひどく冷静な口調で言う彼女に青年は首を傾げる。

―一生、死ぬまで仕えて、王族を殺した大罪を少しでも償えつて言ってるの

そこで彼はやっと気付いた。

今まで物静かで怒るところすら見たことなかった第三王女様は、今、物凄く怒っているのだと。

そんな彼女に、ユオは強くひかれた。

ユオは頭を垂れ、彼女に心より詫び、一生仕えることを誓ったという。

顔をあげて彼女を見たユオは、初めて彼女が燃えてなかった王座に座していることに気がついた。

それからは、女が、女王が国を治めるようになりました。

それからまた、数百年がたち。

国は、五つに、分かれてしまします。

しかし戦争は起きず、友好関係を結んでいます。

やはりその中心にあるのはゼブラ王がかつて治めていた、あの国の子孫たちの国なのだ。

そして、その国の王族だけが珍しい光り輝く金の髪と、澄んだ水のような蒼の瞳を持っている。

それが、ゼブラ王と、賢妃が子孫に託した願いと共に受け継がれている証なのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1136s/>

ユウラス大陸記

2011年6月11日13時37分発行